

現代フルベ族の生活誌

—ラベ近郊のラビコ村に住むジャッロ家を事例として—

渡 邊 薫

はじめに

本稿では、都市近郊で定住をしたフルベ族の生活の現状を記述する。筆者は、西アフリカに位置するギニア共和国で、2003年の3月から7月にかけて、彼らの生活に関する現地調査を行なった。主な調査地は、ギニア共和国の高原地帯に位置する地方都市ラベ、近郊のラビコ村においてである。ギニア共和国におけるフルベ族に関する研究は、その歴史的重要性をフルベ・イスラーム国家の研究から指摘されつつも、ギニア共和国独立以降、余り成されてはいない¹。また、フルベ族はアフリカ大陸の西から中央にかけて、牧畜民として有名である²。しかし、筆者の調査した場所では、定住したフルベ族が住んでいた。本稿では、ムスリムとしてのフルベ族のその歴史的重要性に側面を置くのではなく、現代を生きる彼らの生活誌を描く事を目的としている。そして、生活誌を記述する事によって、その生活実践を描く試みをしたいたいと考えている。

1 調査地概要

1-1 ギニア共和国の概要

ギニア共和国は、西アフリカの南西端に位置し、面積は24万5857平方km（日本の約3分の2）で、人口は約760万人、主要な民族は主にマリンケ族（34%）、フルベ族（29%）、スス族（17%）にわかれ、18あまりの民族が住んでいるとされている。公用語はフランス語で、宗教はイスラム教（75%）、伝統的宗教（9%）キリスト教（4%）とわかれている³。

また、ギニア共和国は地理的条件によって、大きく4地域に区分される。一つ目は、海岸沿いの平野である。二つ目は内陸部で、中部ギニアとよばれ、高原地

帯である。別名フタジャロン高原とも呼ばれる。三つ目は北東部で、高地ギニアとよばれ、サバンナ地帯である。4つ目は、南部ギニアとよばれ、急峻な山地であり、熱帯雨林に覆われている。

ギニア共和国は1958年フランス領から独立した。他の旧仏領の西アフリカ諸国とは違い、完全独立をした。初代大統領の有名な独立宣言がある「従属の中の豊かさよりも、貧困の中の自由を選ぶ」。社会主義路線を走りながらも紆余曲折を経、1984年には大統領セク・トゥーレの死後、ランサナ・コンテが無血クーデターを起こした。その後、世界銀行を中心とした構造調整プログラムによって、民主化が進められ、1993年には、大統領選挙によりランサナ・コンテが選出された。著しい変化を見せる世界経済の中、2003年には三度目の大統領選挙が行われ、ランサナ・コンテが再選された。西アフリカ諸国において様々な形で国内紛争が起きている中、1984年来大きな内紛がおきていない事は特徴的である。大統領は、緩やかな民主化を実現すると声明を出している点も留意しておかなければならない。

1-2 調査地概要

ラベは現在、国内有数の地方都市である。18世紀始めには、フルベ族が急速にイスラム化し、ジハード（聖戦）を起こして、フルベ国家が形成された⁴。それによって、フタジャロン高原一体はイスラム教徒の中心的役割を担っている。筆者が滞在中の時は都市の中心にあるモスクが改築中であった。

筆者の滞在した、ラビコ地区はラベの中心地から、北西約7キロのところに位置する⁵。舗装された道路が、ラビコ地区を東西に横切るように通っている。周辺は緑に覆われている高原であり、小さい川が流れている。季節は4月頃から10月頃の雨季と、10月頃から4月頃までの乾季からなり、雨季には農耕を行なう。ラビコ村内の人口統計はないが、筆者の調査によると約300名が住んでいる。舗装道路は、ラビコ村の北西に位置する軍のキャンプの西側にあるタクシー乗り場まで続いている。そこからは、舗装されていない道路にかわり、土がむき出しとなった道が北西へと続いている。

ラビコ地区の居住形態は大きく3つに分けることが出来る。一つは、19世紀ころから住み始めた、フルベ族の子孫達であるジャッロ家が住む村である。この場

所は、木々等で作られた大きな柵 (*hoggo*) で囲われている。彼らはその祖先を *Diobhoyanke* だと認識している。本稿では、この家族を中心に、以下、記述していく。もう一つは、かつて、彼らの奴隷身分であったフルベ族の子孫や親族の住む場所であり、この場所も大きな柵 (*hoggo*) で囲われている。さらに、ここ20年間で、急増した人々の住む場所がある。これは軍のキャンプが近いため、軍人の家族らがラビコ村内の土地を購入し、家を建て、住んでいる事が大きな要因である。住民構成はフルベ族、スス族、マリンケ族、ゲルゼ族等からなっている。小さな (*hoggo*) で、囲んでいる家族もあるが、基本的には小家族が住んでいる。

また、ラビコ地区には、雑貨屋、自転車修理屋、飲み屋、ビデオ観賞場、路上での野菜・果物売り場等有る。ラビコ地区には、水道も電気も通っていない。その為、この村に住む人々は主に井戸水を使って、炊事や洗濯を行なう。また、夜、家の中で食事や談話をする時には、ランプやろうそくで明かりを灯す。

この電気の無い生活の例外として、ボロと呼ばれる雑貨屋を上げることが出来る。ここにはソーラーパネルがあり、バッテリーを充電する事が出来る。この雑貨屋では、雑貨を売る事の他に、バッテリーを貸す商売をしている。また、学校帰りの青年達の溜まり場的空間になっている。その他、ビデオ鑑賞場や、サッカーをする為の空き地などがある。

ラビコ地区の南東には、マンゴー林が広がっている。大小さまざまな種類のマンゴーの木が無造作に生えている。マンゴーの収穫時期が来ると、子供達や青年らは競って、マンゴーをとりに行く。また、ここでとれたマンゴーを道脇で売る人もいる。

2 ジャッコ家の住居

2-1 ジャッコ家

ジャッコ家の住むラビコ村には、村長がいる。彼は妻を二人もち、一人目の妻と子供、や彼の親族などが、ラビコ村に住んでいる。彼自身は、二人目の妻とその子供らと共にラベの町に住んでいる。彼はラベの町で、子供らにイスラム教を教える傍ら、ラビコ村の儀礼や問題に対しての権限を持つ。また、彼は以前、官僚として働いていた、近代的エリートであると共に、イスラム教を教える事の出

来るカラモコエンという、側面も持つ。2003年当時、彼は80歳を越えていた。彼の説明によると、ラビコ村の歴史は以下のようである⁶。

ラビコ村の創設者の名前は、Mama Bakarと言う。彼はラベの町から18km離れたポポダラのイスラム教師であった。彼は毎週金曜日、ラビコを通過して、ラベのモスクまで歩いて祈りに行っていた。当時、ラベのモスクのシェフであったKaramoko Alpha Mo Labeが彼にラビコの区画を与えた。Mama Bakarの子孫はThierno Abdoulaye Windowoと言い、Windowoとはフルベ語で作家を意味し、彼はコーランの本を書いていた。

彼は妻たちを持ち、彼らの子孫は、Mamadou Alpha, Hamidou Ousmane, Amadou Oury, そして、Ibrahima Diogoであった。私達が生まれるまで、彼らがみな住んでいた。

フタジャロンには5つの家族が存在している。カラモコアルファのWoussinayanke、Gueriyanke、Haldouyaabhe、そして、Padheyankeと私の家族である。

2-2 ラビコ村

上記にも述べたように、ラビコ村は柵 (*hoggo*) と呼ばれるもので囲われている。さらに、世帯ごとも *hoggo* で仕切られている。これは、世帯ごとに、住居や耕作地と鶏、牛、ヤギ、羊などの家畜を管理するためであるかと推測できる。ラビコ村の住人は表1の通りである。

主に世帯主である男性は、出稼ぎなどで住んでいないことが多かった。

	大人	子供(学生以下)	合計
男性	13人	26人	39人
女性	14人	17人	31人
合計	27人	43人	約70人(12世帯)

(表1) 住民、実際に住んでいた人数

また、ラビコ村には村の中心とするものがある。ラビコ村の中心には、ガッレ (*galle*) と呼ばれる場所がある。現地の人と言うには、伝語の *patriarche* に当たるものだという。つまり、村の中心や家族の長という意味で使われている⁷。この場所は、村が出来たときに作られた。また、神聖な場所とされ、様々な儀礼は全てここで行なわれる。ガッレは、20cm四方の石約70個で囲まれた直径約6メー

トルの円形の場所である。円の中心には大きなマンゴーの木が生えており、その回りは小さい赤色の石が敷き詰められている。この場所で日々のお祈りを行なう者もいる。この場所には土足で上がることも、ガッレの中心にあるマンゴーの木に登ることも禁じられている。何か儀礼があるときは、この場所とこの場所の傍にある建物が中心となる。

2-3 二つの住居様式

大きく二つに分けて、彼らが居住している建物は二つに分けることが出来る。一つは伝統的ともいえる建物である。レンガに泥と牛糞を混ぜた円形の壁の上に、日本の藁葺に似た *hudho* を屋根にした建物である。屋根の骨組みには、日本の竹に似たものが使われている。家の大きさは、小さいもので直径約4.5メートル、壁の高さが約1.7メートルである。これは、フルベ語で、*tyuulonhudho* と呼ばれている。この建物の中には、ベッドが置かれ、また、それぞれの私有物を保管する。主に、青年らの場合（男性・女性に限らず）は自分の部屋や寝床として、この建物を利用している。また、これと同じ形でより大きな物もある。お年寄りの人で、この形の建物を利用している人もいれば、赤ん坊の部屋としても造られる事がある。

一方、もう一つは近代的ともいえる建物である。そちらは、レンガとセメントを使用して、建築される。建物の中が、壁で幾つかの部屋に分かれている建物である。屋根は、日本のトタン屋根に類似している。建物の中は、主に、食器置き場、リビングと客間、そして、寝室に分かれるケースが多い。この建物の中では、一世帯で暮らしている場合もある。

事 例：A 14歳 中学3年 母と兄弟合わせて4人ですむ 父はコナクリで仕事

筆者の質問：何で、CASEを造るの？

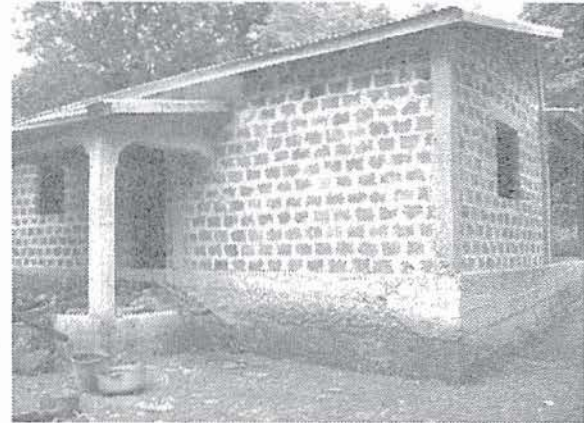
A の 返 答：兄弟達が大きくなって、（近代的な）部屋が狭いため、自分の部屋が欲しい

筆者の質問：一人で決めていいの？

A の 返 答：造るのにお金がかかるから、親の許可が必要。

現地の人のお話によると、大体レンガ一つ購入するのに50FG~75FG必要だとの

事である。この大きさの場合、300個ほどレンガを購入したため、レンガ代だけで、約1万5千FG必要である。また、建築にかかる人件費は村にいる人達で造る為、費用はかからない⁸。



(写真左：2003年5月4日から作り始め5月8日の段階 右：近代的な建物の例)

3 ラビコ村の経済活動

3-1 家畜

ラビコ村内では、牛、ヤギ、羊、鶏などの家畜が飼われている。これらの家畜は、村に住む人々全員の所有ではなく、世帯ごとの所有である。世帯によっては、全く家畜を飼っていない世帯もある。家畜を飼っている人々は、各世帯の敷地内で管理している。ヤギや牛などは、村の外に放し飼いにし、運動をさせたり、草を食べさせたりする。ヤギの首には、三角形に作られた木の棒がはめられている。これは、ヤギが柵の間から勝手に村の外へ、逃げ出すのを防ぐためである。また、ヤギの小屋 (*kula*) から勝手に出ることを防ぐためでもある。

筆者の滞在中、ヤギが足を折るという事態が起きた。このヤギは、村長の第一婦人の飼っていたヤギであり、そのヤギをどうするかという問題が起きた。村長とその代理を務める伯父により、そのヤギの解体作業と、その後の分配が決められた。村長の次男の息子達を中心となり、ヤギの解体作業が行なわれた。普段から儀礼の時には、村に住む青年達が主になってヤギの解体作業をしているため、彼らは、慣れた手つきで解体をしていた。また、途中、どのように解体していいかわからない時は、村内に住むおじさんに聞いたりして、解体作業を終了した。ヤギは各世帯に配ったり、一部をその場で焼いて食べたりした。

3-2 農作物

生業は主に、作物の栽培や家畜の世話である。男性女性関係なく雨季に入ると、農作物を栽培し始める。主な農作物は、トウモロコシ、ピーナッツ、マニオク、サツマイモ、タロイモ、ハリコなどである。栽培されるこれらの作物は、世帯ごとによって、量も種類も異なる。また、各世帯の人々が、互いに農作物の栽培を助け合う事はまれであり、通常は、各世帯がその敷地内で耕された畑を管理する。耕作面積は、敷地の広さによってまちまちである。また、各屋敷では果物の木も植えられている。オレンジやマンゴーは、どの家庭でもたいてい植えられている。これらの木々は、もともと生えていたものもあれば、苗木から育てたものもある。各世帯で、よく庭に植えられているのだが、これは、強い日差しを遮るための、日陰場所として利用される事もある。

4 学校

4-1 イスラム教教育

イスラム教のコーランの事をフルベ語でアルゴルワーナ (*argorwaana*) という。そして、イスラム教を教える先生の事をカラモコエン (*karamokoen*) という。彼らは、コーランの内容を全てフルベ語に訳せるといふ。ラビコ村内には、二人のカラモコエンが住んでいる。子供達は、幼い頃から彼らにコーランの読み方を習う。ここでは、村長の息子である、タリベ氏の子供達の例を挙げたいと思ふ。

彼の子供達が通ったイスラム教師 (以下カラモコエンと呼ぶ) の家には、好きな時間にいける。彼らのカラモコエンは、ラビコ地区内の、もう一つの村、かつては彼らの奴隷達が住んでいたとされる村に住んでいた。村と村の間の距離は約500メートルほどである。普段、カラモコエンは自分の家で、書き物をしたり、コーランを読んだりしている。カラモコエンは多くの子供達にコーランの読み方を教えているため、それぞれの子供の進み具合によって、読み方を少しずつ教える。

コーランの読み方を習得していく段階は3段階に分かれる。まず、*Bha* と呼ばれる段階である。これは、子供のための読み方を練習させるものであり、木簡

(*allwal*) と呼ばれるものを使って、練習をする。次に *Sigi* と呼ばれる段階がある。これは、一つ一つの文字をアラビア語発音で練習させるためのものである。その練習には、木簡と本 (*deftere*) などが使われる。最後に *Finditul* という段階がある。これは一つ一つの文字をつなげて発音させるものである。この段階では、アラビア語で全てのコーランを読むための練習が行なわれる。この3段階が終了すると、生徒個人の希望によって、各地域から集まってくるカラモコエンたちの前で、試験のようなものが開かれる。その後、コーランの内容を知って行く段階に入る。その為には、自ら、セレモニーといわれるものを開かなければならない。その費用は、自らが主に負担しなければならない。

ラビコ村には、イスラム教の学校 *doudhal* (*doudhe*) がない。また、ラビコ地区には大勢生徒が集まるような場所も、モスクもなく、学生が個々にカラモコエンのところに通って、コーランを勉強していた。教えてもらう時間は、個人によって様々だが、5分程で、毎回ごとに、復習と新しい読み方等を少しずつ勉強していた。

居候をさせて頂いた家族の子供達のコーランの勉強は右 (表2) の通りである。大体、朝、子供達はコーランを勉強する事がない。学校が休みのときなどは、カラモコエンのところに行き、勉強をする。夕方になると、家の中の一室でランプの周りに子供達が座り、20分間程コーランを音読し続ける。下の子が読み方を忘れた場合、年長者が教える。時には年長者が年少者顔の頭を叩く事もある。

月	朝・夜
火	朝・夜
水	朝
木	
金	夜
土	朝・夜
日	朝・夜

(表2) コーランを勉強する日

タリベ家の子供達が通うカラモコエンの家は、もう一つの村 (かつて奴隷たちが住んでいた) にあった。ラビコ村にも3人のイスラム教師が住んでいたが、その先生達には教えてもらっていなかった。

1人目 (Mamadou Oury) は、毎日ラベの町まで教えに行っている。2人目 (Ibrahima) は、交通機関の仕事をしているので、普段は教えていない。3人目は彼の家で、イスラム教師をしていた。子供たちに聞くと、「カラモコエンは、自由に選べる」と言っていた。つまり、誰に教えてもらうかは、生徒自身で選ぶ事が出来るのである。普段は、小学校や中学、高校があるため、この時間通りに、

コーランを勉強する事はまれであった。また、ラビコ地区にはモスクがないため、金曜日の礼拝の時間は他の地区にあるモスクまで行かなければならなかった。

4-2 近代教育

ギニア共和国には、フランス式の学校教育制度も存在している。その為、学生らは、コーランの習得の他、学校にも通わなければならない状況にある。ラビコ村の青年を事例として、どのような生活をしているのか、述べていきたい。

事例 B 中学3年生

彼は、ラビコ村からラベに向かって、歩いて約1時間半の距離の中学校へ通っていた。学校のある日は、大体6時半から7時に起床をし、主にパンと紅茶の朝食をとって学校へ向かう。彼は、黄土色の制服をきて、自転車で学校へと向かう。大体、かつて奴隷であった村の同級生と二人乗りで、学校へ向かう。学校では、毎朝国家を歌い、授業を行なう。教科書を持っている人は殆どいないため、先生が黒板に板書するものをノートに書き写すという形式をとっていた。授業はたいして12時で終わる。筆者が滞在していた時は、丁度進級試験の時期であったため、彼は家での復習も欠かさず行なっていた。学校での授業の内容や、試験の内容は調査不足のため、省略させていただく。

事例 C 中学3年生

彼は事例Bの兄である。彼は、ラベ近郊の中学校まで通っていた。中学校は、徒歩で2時間ほどのところにある。授業の形式は、殆ど変わらない。彼は、進級試験に何度か落ちている為、弟と同じ学年ということになる。

事例 D 中学4年生

彼は、上記の親族にあたる。内実は、兄弟に近い。彼は、北西にある中学校に通っていた。徒歩で40分ほどの距離であろうか。軍のキャンプの傍にある中学校である。授業の形式は殆ど変わらない。先生が板書したものを、ノートに書き写すといったものである。彼の場合、進級試験の後、高校の選択で悩んでいた。高校はラベの町周辺に三つほどある。リセ（高校）コンコーラとリセランサナコンテとリセホーゴンブッロである。どの高校に行くかは選択可能である。

事例 E 高校2年生

彼は、歩いて1時間半ほどのリセホーゴンブッロに通っていた。彼はヴァカロ

レアの試験を受けるための準備もしていた。ギニアでもヴァカロレアの試験があり、この試験の成績しだいで、大学への進学が決まる。授業の形式は、やはり板書をノートに写すというものである。

以上AからEまでを事例としてあげたが、殆どの生徒は教科書などを持っておらず、先生による板書をノートに書き写すという授業形式をとっていた。また、中学、高校ともに12時で終わるといふ事情の背景には、学校で昼食をとる経済的余裕がないという要因が大きいものと思われる。

5 ラビコ村での儀礼

ラビコ村で行なわれる儀礼がいくつあるのか。現地の人に訪ねてみると、ムスリムの行事に関するものを中心とし（表3）に挙げられる儀礼が主に行なわれるとの事であった。その、ほとんどの儀礼は、ラビコ村内で行われるらしく、儀礼によってはラビコ村外の親族や関係者らが大勢集まるといふ。筆者がラビコ村に滞在中、実際観る事ができたのは、洗礼式とモハメットの誕生日であった。二つの事例をここで記述したい。

<i>Bheera</i>	pour mariage	結婚式
<i>Dennabu</i>	Baptême	洗礼式（赤ちゃんの名づけ）
<i>Alluwal</i> <i>Alluge</i>	finir le kolan	（単）コーランの卒業式 （複）
<i>Faatunde</i>	en déséder	葬式
<i>Mauluudu</i>	Nessance de profette mohamet	モハメットの誕生日 一晩中コーランを読み明かす
<i>gyurde suumaye</i>		ラマダン（断食）
<i>gyurde donki</i>		イスラムの新年
<i>gyurde soroyamba</i>		羊祭り
<i>Hottugol</i>		建物の完成式

（表3、儀礼一覧）

5-1 洗礼式（*Dennabu*） Thierno Amadou Sow

4月13日

10時頃 ・各地から集まった人々が村の中心に集まりだし、*Galle*の中に座

る。男の人達は互いに挨拶をする。(左手首で自分の右手首を持ち、握手する事が敬意を表す意味を持つ) また、大人たちがふざけて、一人を担いで、ヤギの代わりに切るしぐさをして、盛り上げたりする。(村長は風邪を引いたため参加する事が出来なかった)

- 10時15分
- ・男性がヤギの首を切ると同時に新生児の名前をみなの前で、大声で言う。村長代理のMamadou Ouryが、ヤギの首を切る人をその場で決定する。新生児の名前は事前に父親が決めている為、その名前を上記の男性が言う事になる。その後、青年達が中心となり、ヤギの解体作業に入る。数名の年長者が、解体に際しての指導を行なう。
 - ・多くの大人達は、解体作業が始まる頃、*galle*近くの建物で食事を開始する。この食事の準備は、女性達が行っていた。
- 10時40分
- ・新生児の家の前で約10~15分間太鼓、太鼓たたきの人がタムタム(ジャンベ)を叩く。この時、少女らが音に合わせて踊る。太鼓叩きはこの日の為によばれた。太鼓をたたき終わると、皆から小銭を稼ぐ。大体50~200FGが相場だろうか。お金をあげる人の善意に基づくものと思われる。筆者が1000FGを渡そうとしたら、困惑した様子であった。
- 11時
- ・ヤギ解体作業終了、主に青年らが、*galle*周辺で、解体作業を全て終わらせ、*galle*近くの建物の中で、大人たちと入れ替わって食事をする。この日はマーフエティガ(*maafe tiga*)と呼ばれる、ピーナッツベースのスープと、マーフエスープ(*maafe suupu*)と呼ばれるトマトベースのスープを、それぞれ、ご飯の上にかけてのものであった。
 - ・女性達は男性達と別の場所で食事をする。*galle*周辺の各世帯の家々に分散し、食事を取る。
 - ・徐々に人が帰りだす。さばかれたヤギは少しずつ各家庭へ。
- 12時40分
- ・村に住む人々や、世間話をする人々が残る。終了した模様

- ・新生児が生まれた両親の建物に行き、新生児を見せてもらう。部屋の中には、新生児を抱く母親がいて、参加者からの5つ、米・ヨーグルト・布・石鹸・クスクスの贈り物がおいてあった。

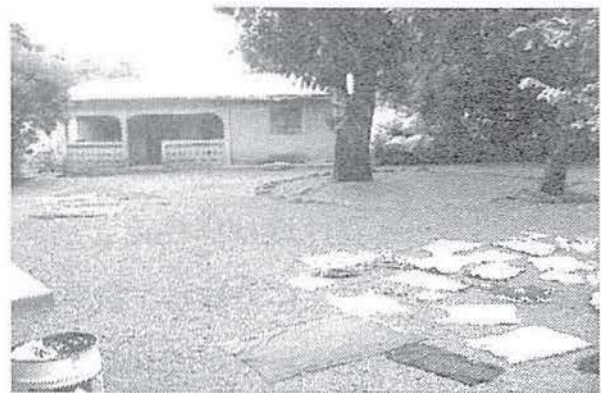
上記の儀礼は、新生児が生まれてから数日たって行なわれた。参加者は100人程で、この儀礼は新生児の命名と共に、親族関係の求心的役割を果たしているという見方も出来るのではないだろうか。

5-2 モハメットの誕生祭 (*Mauluudu*)

5月13日

- 22時頃
- ・ *galle* そばの建物の中では、既に多くの人間がコーランを音読していた。村内に住む男性は少年から老人まで全員参加していた。その建物の家の隣の部屋や、その建物近くの家で女性たちが待機していた。
 - ・ コーランを読まずにボーとしている子供もいるが、経典をみなで回しながら読んでいった。何冊かに分かれている経典を各自で交換したりしている。
 - ・ 著者は日本語で言うところの数珠のようなものを借りて、3つの唱えごとをしていた。
- 24時
- ・ カラモコエン達が一人一人、コーランの一部を読む。
- 24時半
- ・ 各世帯主らが、コラ (*kolla*) の実を取り分ける。また、この際に使われて余ったろうそくやマッチ等は、青年や子供達によって分けられる。
 - ・ カラモコエンを中心に皆でお祈りをし、終了。

次の日、町に住む青年に、ラベのモスクでの状況を聞いたら、ラベの町の中心的なモスクでは、彼らは朝の5時過ぎまでずっとコーランを読んでいたようだ。



(写真左： *galle* と呼ばれる場所 右： 奥の建物で *mauluudu* が行なわれた)

この儀礼は、本来モスクで行なわれるものだと考えられる。上記にも記したが、ラビコ地区にはモスクがなく、近くのポレコ地区のモスクでも歩いて2時間ほどかかる。その為、写真右の建物が、この儀礼においてモスクの役割を果たしていると考えられる。また、筆者の調査時期に、ラビコ地区内にモスクの建築計画が進められていた事を付け足しておく。

6 結び

上記で述べてきたように、彼らはラベの都市近郊のラビコ村で、農業や牧畜といった生業だけでなく、日々、多様な暮らしぶりを行っている。そういった点から見ると、日本の地方都市近郊と余り代わりのない暮らしぶりであると言えるかも知れない。

ただ、日本との大きな違いは、公共事業の不整備だとか、「便利ではない」生活である点ではないだろうか。または、イスラム教が彼らの価値観や道徳基準の柱となっている点にもあるのではないだろうか。

技術革新によって、次々と新たなものが出現する近・現代の中で、彼らの暮らしもそれと無関係ではいられない。金銭的に豊かな暮らしをしている人は、衛星テレビをもっており、携帯電話を当たり前のように使っている。新たなもの、興味や関心を引くもの、に対する好奇心は彼らにとっても我々にとっても同様なのではないだろうか。それは、人間として、ごく当たり前のことなのかもしれない。

ギニア共和国の国家的な大きな問題としての、「近代化」がいかに関わりの生活の内部に変化をもたらしているのか。また、イスラム教を中心とする価値観や道徳基準がそれによって、どのような役割を果たしているのか。それが今後の筆者にとっての課題である。

<注>

- 1 (嶋田義仁1995: 7-13)
- 2 (小川了1987) 彼は、セネガルに住むフルベ族に関する民族誌を書いている。
- 3 統計は、2002年度外務省調べによるものである。
- 4 本稿では、現代のイスラム・フルベ族とするため、ジハードの歴史に関する記述は省略させて頂く。詳しくは岡倉登志(1990)。

- 5 行政区分はPréfectureラベ (labé)、Sous- prefecture (labé-centre)、Quartierポレコ (Poleco)、Secteur ラビコ (Labico) となっているが、本稿では便宜上、行政単位のラビコ区と、ジャッコ家の住む場所のラビコ村とに分ける。
- 6 彼はフランス語に堪能であり、それを翻訳したものである。
- 7 2003年ゼミ内演習で筆者が発表した時、嶋田氏によるとフルベ語でgalleの原義は「家」にあたることである。
- 8 一ユーロが約2000FGと考え、一ユーロ約135円と計算すると、一円がやく15FGにあたる。ちなみに現地でのファンタの価格は首都で300FG、ラベで500FGであった。

〈参考文献〉

- 岡倉登志著 (2001) 『アフリカの歴史』 明石出版
 小川了 (1987) 『サヘルに暮らす』 NHKブックス
 嶋田義仁 (1995) 『牧畜イスラーム国家の人類学』 世界思想社
 中村弘光著、(1982) 『アフリカ現代史Ⅳ－西アフリカ』 山川主版社
 ピエール・プラデルバン、犬飼一郎訳 (1995) 『アフリカに聞き入る』 めこん

(わたなべ かおる 比較人文学)